

2000年 の眠りから 覚めた種子

～植物たちの繁殖戦略②～



今回は、植物たちの繁殖戦略の第2弾。数千年の時空を越えて旅する種子のお話。

1951年3月30日の夕方、千葉県千葉市検見川にある東京大学検見川厚生農場（現在は、東京大学検見川総合運動場）にある遺跡で、**1粒のハスの種子**が発見された。この地では、縄文時代のものと思われる丸木舟3隻やハスの果托などが発見されていたことから、植物学者でハスの権威でもあった**大賀一郎博士**（当時68歳）は、縄文時代のハスの種子を求め、発掘調査を行っていたのだ。

発掘調査は、3月3日から地元の小中学生や一般市民のボランティアなどの協力のもとに進められていたが、困難を極めた。めぼしい成果が得られないまま、明日で打ちきりという30日に、地元の女子中学生によって地下6mの地層の中からハスの種子1粒が発見されたのだ。調査は延長され、4月6日にも2粒見つかかり、計3粒の種子が発掘された。大賀博士は、3粒のうち**1粒の発芽に成功**し、翌年の7月18日、ハスはみごとにピンク色の花を咲かせた。このニュースは国内外にも報道され、このハスは大賀博士にちなんで、「**大賀ハス**」と命名されたのである。

さらに、博士は、種子の年代を明らかにするため、発掘されたハスの種子や丸木舟の木片を**シカゴ大学**原子核研究所に送り、年代測定を依頼した。調査の結果、それらは**2000年前(弥生時代)**のものであると推定された。つまり、発掘されたハスの種子は2000年の眠りから覚めたのである。以来、大賀ハスは千葉県の天然記念物に指定され、日本各地だけでなく世界各国の**150カ所以上**に株分けされ、広まっている。

大賀博士の発見から68年後の**2009年1月3日**、千葉市検見川（現、花見川区朝日ヶ丘町）の大賀ハス発掘現場跡を訪問した（上の写真）。その周辺の道路は「**大賀ハス通り**」と命名され、**マンホール**のふたにもハスの花が図案化されるなど、大賀ハスをテーマとした町づくりが進められていた（右の写真）。なお、発掘記念碑には次のように刻まれていた。

「1951年3月30日 前方300mの地点で古代ハスの実が1粒大賀一郎博士によって発掘された 2000年以上地下に眠っていたハスの実は その年の5月発芽し 翌年7月18日 淡紅色の美しい花を開いた この大賀ハスは世界の各地に移植されて生命の神秘を開示している 1964年7月18日」

大賀博士は、1965年6月15日、82歳で永遠の眠りに就かれたのである。



ハスの果托と種子（ハスの花が咲いた後、種子の入った果托が肥大する。これがハチの巣に似ているため、古くは「蜂巣（はちす）」、それが略されて「はす」になったといわれる。）
H21.1.7 都賀町の都賀の里にて採集。



